
Angel Beats! ～この世界で見つけた大切なもの～

神風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel Beats! ～この世界で見つけた大切なもの～

【Nコード】

N5577M

【作者名】

神風

【あらすじ】

これは本来の主人公「音無」視点ではなく、その親友「日向」視点からみたAngel Beats! のもう一つの物語。本編中ではあまり詳しく語られなかった日向とユイの下りなどをあくまで作者独自の解釈ではありますが、この物語の中で少しでも補完してくれるのなら幸いです。

Prologue Regret

この死後の世界に来てからもうどれ位の時間が経っただろうか。

ゆりっぺとともにこの世界にきてからさんざん勝手なことをやりとおしてきた。そして色々なことがありすぎた。出会いがしらに校舎の屋上から落とされたのを始め、顔の形が変わるのではないだろうかというくらい殴られた時もあった。時には校庭でビーチバレーもどきをした。刀でバラバラにされたこともあった。

……いやなこと思い出しまつた。できればこれらの記憶はすべて心の奥底にしまつて鍵をかけたままにしておきたい。

自分たちに理不尽な運命を強いた神に復讐することができるところ、それがこの世界。ゆりっぺはそう言っていた。神を排除し、この世界を手に入れるそれを果たすためにこの世界に残って神に抗い続けているわけだ。

俺自身は正直神に特別な恨みが存在するわけでもなし。むしろ、俺は最後の最後まで人間の屑のまま人生を終えてしまった。悲惨ではあったかもしれないが、自業自得な人生だったのに最後に心の整理をすることができるとこの世界に送ってきた神に少しばかり感謝してもいいかもしれない。そんな俺だから、普通ならこの世界からもう消えている存在なのかもしれない。だが、そうもいかなかった。言わば神への復讐心だけがあいつを動かしている原動力なんだろう。そんな不安定な感情だけで動いているあいつを置いて消えるわけにはいかなかった。放っておけばいつか壊れてしまうのではないかと……。

よく勘違いされるが、これは恋愛感情から来るものでは決してない。これまで散々好き勝手振り回されてはこの世界で何度も殺されているんだ。そんな奴に恋愛感情を持ってって方が無理な話だろ？俺はただ単純に心配だったんだ。……言ってること変か？俺。

そもそも、この世界で愛というものが芽生えるのか。人間の魂の存在が外部からしか入ってこないような世界だ。しかもその魂はすべて理不尽な人生を強いられてろくな最後を迎えられなかったやつらだ。そんな心に深い傷をすでに負ってしまっている魂に、愛を感じる事ができるのだろうか。そうゆりっぺは否定していたが、俺はそうは思えなかった。いや、思いたくはなかった。そんな悲しくて残酷な世界があつてたまるかと……。

この世界での生活は嫌いではない。むしろ、ここでの生活を楽しみつつある自分もいることもまた確かだった。毎日が生きていたころより輝いているとも思えた。そういう面では俺はまだ未練は残っているのかもしれない。

まだ、この世界で――――

EPISODE. 01 Departure (First part)

真夜中、俺は校舎の周りを巡回していた。夜は人通りが少ないので足音が響きやすい。だから気配を殺して音を立てず歩くというのは最初は難しかった。(昼間でも難しいが)

だが人間やろうと思えば案外大抵のことはできるようになるものだ。毎日、天使との実践を繰り返しているうちに色々な軍事的スキルが身に付いている。尾行の仕方からスナイパーライフルの使い方まで、大抵のことはできるようになった。だが、慣れたとはいえ、この広さを少人数で巡回するのはちょっととした骨だ。最近じゃうっかり消えてしまったやつも多くなっちゃって人手が足りてない。だがらベテランである俺も雑用に駆り出されることもしばしば。

「まあ仕方ないけどな……」

俺は思わず思ったことをそのまま呟いた。

今日のオペレーションは天使の撃墜作戦だ。

まあようは天使の頭でもどこでもいいから弾でぶち抜いて仮死状態に持っていく。そんなでもって予め掘っておいたふかくい穴に天使の死体を放りこんで埋める。いたってシンプルな作戦だが、一度も成功したためしがない

理由はその時によってまちまちだが、主だった理由はまず弾が貫通する前に大体防がれちまうとこだ。もう一つは、たとえば仮死状態まで持っていき埋めたとしても並大抵の深さじゃ簡単に脱出されちま

う。今回は、熱した鉄でも流し込んで一緒に固めてしまおうという魂胆らしいが、果たしてうまくいくかどうか……。

そういえば今回は新人勧誘も同時進行するとかゆりっぺが言ったな。まあ効率的といえど効率的かもしれない。けどこの世界に來た人間にいきなりそんな血なまぐさい光景を見せていいのか？

……まあいつか。人が少ない今はどんな汚い手を使ってでも新人を勧誘しないと！

さっきまでは月明かりが射していて明るかったんだが雲に隠れてしまつて前が見ずらくなつてきた。

「私は——よ……なさい？」

しばらく歩いているとゆりっぺの声が聞こえてきた。誰かと話しているのか？ ちよいどいいや、勧誘の件について聞いておくか。俺は声が聞こえたほうに歩きだした。

校舎の角を曲がると人影が見えた。暗闇で少し見ずらいがあれは間違ひなくゆりっぺだろう。やっぱりもう一人いるみたいだが、まあいいか、天使じゃなさそうだし。

俺はゆりっぺのほうに小走りで近づく。

「おーい、ゆりっぺ！ 新人勧誘の件はどうなってるんだ？」

「…げっ！」

ゆりっぺは俺の顔を見るなりまるで苦虫をつぶしたような顔に変わった。にしても顔を合わせた途端に『げっ！』はないだろ……俺何かやったか？

こいつがわが戦線のリーダー、ゆりだ。若干赤みが掛かったショートヘアーに緑のリボンが付いているヘアバンドを付けている。容姿はかなりいいほうで、道端ですれ違ったら思わず振り返ってしまうくらいだが、性格が吹っ飛んでいる。今の一言で大体察していただけたかと思うが、いわゆる黙ってりゃ可愛いタイプだ。ちなみにゆりっぺっていうのは俺がつけたあだ名だ。自分でもなかなかセンスいいと思うんだが本人はあんまり気にしてないらしい。けど、その割には自分から呼称を広めてる節があるから、やっぱ気に入ってるのか？

「悪いけど日向くん、今は――」

「人手が足りない今、どんな汚い手を使っても新人を戦線に引きずりこまなきゃいけないよな！俺、さっきから見まわってるんだけどさ、それらしいやつらが一人もいなくてさ――」

俺はゆりっぺの声をさえぎって報告をした。ん、なんで頭抱えて項垂れてんだ？

「……報告ありがとう日向くん、ついでに素晴らしい先輩のメッセーじをどうも」

ゆりっぺは顔を引きつらせつつ、俺が立っている横の地面を指で指す。なんだ？

「……………えーっと」

混乱と失望が入り混じっているような微妙な顔で俺を見上げている一般生徒の制服を着ているやつがいた。短髪で赤毛、服の上からだから分かりにくいのが、筋肉はけっこう引き締まってそうで、身体能力はそれなりにありそうだ。

「……………あれ？」

えーと、つまり？

「ゆりっぺ、まさかこいつ……………」

「……………っ」

ゆりっぺは何も言わずに黙りこくる。……………えーっと、俺今ここであるって言ったわけ？

「俺、向こう行くわ」

そいつは無言で立ちあがると、そう一言いい残して校庭側に歩いて行ってしまった。

「うわああああ！ 勧誘に失敗したあああああっ！？」

ゆりっぺは両手で頭を抱えて絶叫した。……………あれ、俺のせいかな？

「……………あー、ゆりっぺ？」

「……なに？」

うお、怖え！ でもここで何も言わないと絶対痛い目にあうので何か言わなくては。

「……まあ、あれだ。……こんなこともあるって！」

俺はキラーン☆みたいな効果音が聞こえてきそうな満面の笑みでそう答えた。

「お前のせいじゃあああ！ アホ————！！！」

ゆりっぺのハイキックが炸裂してよける間もなく俺の後頭部にクリーンヒットした！！ い、いい蹴りだぜ相変わらず……ガクッ。

あとから聞いた話だが、この直後、俺の意識は20分位飛んでたらしい。なのでこの直後で校庭で起きたことは俺は知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5577m/>

Angel Beats! ～この世界で見つけた大切なもの～

2010年10月10日16時55分発行